

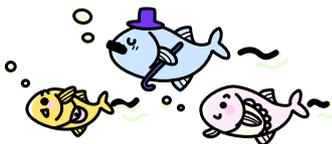
面談室での面会交流

Yくんは1歳のときにS国から父親と一緒に日本に帰国しました。S国に残った母親は、Yくんと会えないまま3年を過ごしました。4歳になったYくんは「お母さんってどんな人なの?」、「お母さんに会いたい。」という気持ちを父親に伝えるようになりました。父親はYくんと母親が会えばYくんがS国に帰りたいたいと言い出すのではないかと思う一方、このままYくんが母親の顔を知らないまま成長するのは望ましくないと考えて、弁護士に相談をしました。その結果、弁護士からADR（裁判外紛争解決）を勧められ、父親と母親はADRを経て、年2回、日本でYくんと母親の面会を実施することに合意しました。

面会を実現するに当たって、Yくんの父親はISSJ（社会福祉法人 日本国際社会事業団）のソーシャルワーカーと相談を重ね、母親にソーシャルワーカー立会いの下でISSJの面談室を利用してYくんと面会することを提案しました。母親も落ち着いた場所でYくんと時間を過ごすことを希望し、休暇を利用して来日をした際に、ISSJの面談室で面会交流を行うことに同意しました。

当日は父親がYくんの面談室への送迎を担当し、面会終了時間にYくんを迎えに来ることになりました。久しぶりに母親と対面したYくんは、緊張と照れから、黙りこんだまま面談室にあるおもちゃを使って一人で遊びはじめました。しばらくは母親もおもちゃを介しながらYくんに話しかけ、Yくんがそれに答えるかたちでコミュニケーションをとっていました。次第に緊張がとけてくると、Yくんは自ら母親に話しかけるようになりました。帰り際にYくんは「お母さん、また会える?」と尋ねました。母親はYくんに「次回はどこかに出かけてみようか?」と提案し、面会交流を終えました。父親は立ち会ったソーシャルワーカーから面会交流中のYくん

の様子を聞くことによって、今までの不安が多少なりとも解消されたといい、母子の交流機会を前向きにとらえることができるようになりました。

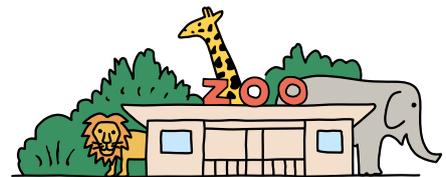


外部での面会交流

D ちゃんは 1 歳のときに P 国から父親と一緒に日本に帰国しました。その後の 5 年間は母親と会うこともありませんでした。そこで、母親がハーグ条約の枠組みを利用して日本の家庭裁判所に面会交流の調停を申し立てたところ、紆余曲折を経て、面会交流を実施することに父親も合意をしました。父親は母親と直接連絡を取り合うことには抵抗があったため、第三者の立会いの下で面会交流を行うことを希望しました。母親も日本語しか理解しない D ちゃんとのコミュニケーションを手助けしてくれる第三者の立会いを望み、ISSJ を利用することに合意しました。

面会交流は 2 日間にわたって ISSJ の事務所から離れた地方都市で行われることになりました。ISSJ のソーシャルワーカーは、面会交流の前日に地方都市に移動して D ちゃんと顔合わせをし、2 日間の交流時間を一緒に過ごすことを伝えました。

1 日目は、D ちゃんの希望にそって、動物園で待ち合わせをしました。前日に顔合わせができていたので、D ちゃんはそれほど緊張せずにソーシャルワーカーを受け入れることができました。また、母親ともすぐに手をつないで園内を歩き始めました。母親はソーシャルワーカーを介して D ちゃんに話しかけたり、D ちゃんの問いかけに答えたりしながら、自分の思いや気持ちを伝えました。ソーシャルワーカーは、母子のコミュニケーションを手助けしながら、二人の心理的な距離感が縮まっていくのを感じました。2 日目も D ちゃんの希望に添えて、広い公園でなわとびやボール投げをして過ごしました。



別れ際に D ちゃんは「また今度、遊ぼうね。」と母親に伝えたものの、なかなか去りがたい様子でした。ソーシャルワーカーが時間を告げると、D ちゃんは母親とハグをして、迎えにきた叔母と共に帰途につきました。面会交流後にソーシャルワーカーは父親から「D ちゃんがお母さんとまた会いたいと言っている。」という報告を受けました。母親が頻繁に来日することは難しいため、今後は「ウェブ見まもり面会交流」の利用も検討することになりました。

ウェブ見まもり面会交流

Kちゃんは3歳のときにT国から母親と一緒に日本に帰国しました。その後、Kちゃんが父親と会う機会はなく、連絡も取れなくなってしまいました。父親は5歳になったKちゃんと連絡を取ることを望み、T国の中央当局に面会交流の援助申請をしました。T国からの申請を受けた日本の中央当局（外務省領事局ハーグ条約室）が母親に連絡をとったところ、母親は父親とは直接連絡を取りたくないが、家庭裁判所の面会交流の調停の場であれば話し合いに応じると回答し、家庭裁判所で調停が行われることになりました。

家庭裁判所の調停では、父親は頻繁に訪日することは難しいため、インターネットを用いた面会交流の実施を希望しました。一方、母親は2年間も交流のなかったKちゃんと父親だけでインターネットを利用した交流を行うことに不安を感じていました。そこで両者は、ISSJのソーシャルワーカーが子どもと別居親を見まもりながらウェブ上で面会交流ができる「ウェブ見まもり面会交流」を利用することに合意しました。

ISSJは父親とKちゃんのウェブ見まもり面会交流の日程を調整し、交流当日を迎えました。久しぶりに見る父親の姿にKちゃんは緊張した面持ちで画面を見つめていました。父親もまた同様に緊張している様子で、会話もなかなか弾みません。そこで、ソーシャルワーカーはKちゃんに最近楽しかった出来事をたずねてみました。すると、少しずつKちゃんは自分のことを話すようになりました。ウェブ見まもり面会交流の回数を重ねるなかで父子は少しずつ会話のキャッチボールができるようになりました。父親との交流を楽しみにするようになったKちゃんの様子をみて、当初は不安を感じていた母親も父子の交流を前向きにとらえることができるようになりました。



ウェブ上での交流が進むと、父親はISSJに対し、Kちゃんのお誕生日にT国からプレゼントを送りたい、と申し出ましたが、母親は現住所を明らかにしたくないので、受け取りは難しい、と応えました。そこで、ISSJが仲介をしてプレゼントの受け渡し役を担うことを提案したところ、母親もその提案を受け入れました。Kちゃんはお誕生日に父親からプレゼントが送られてくることを楽しみにしています。